



IMAGINE HOME, イマジンホーム、スイートホーム SWEET HOME

札幌文化芸術交流センター SCARTS スタジオ 2

2024.11.06. 水 19:00~21:00 | 07. 木 11:00~13:00 | 07. 木 16:00~18:00

インタビュー対象者 ジョン・イギョム（仮名）
パフォーマー 吉川 春奈 描写パフォーマー
久野 志乃 イラストレーター
プロダクション バン・ジェハ 企画・演出
パク・グンヨン AD
朴 炫貞 プロデューサー
キム・ソルジ ドラマトウルグ
チョ・ジフン 技術監督
カン・ジェヨン 事務 / 技術協力
イム・ガヨン リサーチャー
オロ・ミンギョン 音楽監督

ワークショップ 朴 炫貞、宮本 道人
フロアスタッフ 渡邊 智久、坂井 恭佳
通訳 尹 太佑
写真記録 小菅 謙三（空のアトリエ）
映像記録 福津 圭佑、寺田 一貴
サポート ハ・スンヒ
主催 北海道大学 CoSTEP、バン・ジェハ
協力 札幌文化芸術交流センター SCARTS（札幌市芸術文化財団）
札幌天神山アートスタジオ
韓国文化芸術委員会
助成 ポストヒューマン社会のための想像学

私たちはイメージを想像し、
そのイメージは私たちによって変形される。

家とは、特定の住所の上しっかりと立っているひとつの場所であり、数多くの物が詰まった巨大な空間だ。リビングにかかる額縁や、食器を収める棚など、家を構成するすべての物はそこに住む人の物語を内包している。人が刻一刻と変化するように、家もまた時の流れと共に変わる。したがって、そこにまだ住んでいる場合でも、すでに去ってしまった場合でも、「あの時」の自分や自分が住んでいた家は過去を思い返す形でしか存在しない。この点が、私たちが家という空間をしばしば頭の中でイメージとして描く理由だろう。

今日の公演では、帰ることのできない二つの家を想像する。それぞれの家に関する記憶は音声で具現化され、その音声は入力文として抽出され、AI がイメージを生成するきっかけとなる。人間と非人間が共に社会的な境界を越えてきた二人それぞれの「当時の家」に関する記憶に従い、家をイメージとして作り出す。こうして国家という境界、国籍という区分が個人の親密な空間にどのように浸透しているのかを考察する。

キム・ソルジ

ドラマトゥルグ

コレクティブ分断イメージセンター、ダブルデッキワークス代表

第1章は北朝鮮から韓国に移住した人、第2章は日本から韓国に移住した人が住んでいた家を描く。AI はこの二人それぞれの家の物語から抽出した入力文を基に、グローバルな計算システムのネットワークからAI イメージを生成する。AI が作り出したイメージの不確実性や偏りは、この二人に課された社会政治的な特殊性を裏付けるだろう。言い換えれば、このAI の高度に精巧な不完全さは、巨大な計算空間において彼らに関連するデータが占める領域の狭さを証明することになる。AI が依存するネットワークには、北朝鮮脱出住民や在日^{*2}の家を演算するための十分なデータが存在しないからなのだ。このイメージは角度がずれていたり、細部が誇張されていたり、穴が開いていたりするかもしれない。人の記憶から抽出した入力文を基にAI が生成したイメージを「想像」と呼ぶことができるだろうか？

ここで観客が介入する。観客が客観的な質問に対して○/× で答えると、その回答が処理可能なデータとなる。このデータはAI が作った滑らかなイメージを変形させ、AI イメージの完成度を無化する。また、観客はAI がイメージを生成するための具体的なイメージを描写する役割も依頼される。イラストレーターは、AI が描いた家のイメージをこのメモを基に描き起こす。AI イメージが誤解や歪曲、不均衡を伴わざるを得ないとすれば、イラストレーターが描いたドローイングこそが真の「想像」の産物となるのだろうか？ 私たちは知らないもの、手の届かないものについてどのように想像し、その想像はいかにして真実に近づくことができるのか。

私たちの想像がどんな「スウィートホーム」を思い描けるか楽しみにしながら、イメージと音の間を歩き回りながら、物語を聞き、イメージを読み解き、質問に答えてみよう。常にどこかに居住しなければならぬ存在として、自分の家を支え、貫いている社会的ネットワークを肌で感じ、自分が他人の家にかかるプレッシャーについて振り返る時間になることを想像する。

^{*1} 《PLAY HOME, SWEET HOME》（ソウル：Post Territory Ujeongguk, 2023）、《MAKE HOME, SWEET HOME》（ソウル：Doosan art center, 2024）

^{*2} 話者の話のまま表記

誤解を生み出す余白のある、
どこかのスイートホームへ

朴 炫貞

プロデューサー

アーティスト、北海道大学 CoSTEP 特任講師

鮮に対してミサイルや拉致、独裁政権に対する否定的なイメージが強い。その中で本作品の初めての海外公演の地として北海道の札幌を選んだ理由としては、地理的に近く、移民によって都市が拡大し、近年は先住民であるアイヌ民族との関係を反省的に振り返る機運が高まっている場所という点から、アイデンティティと科学技術、情報や解釈についてより積極的に考えるきっかけを生み出すのに適した場所だと考えたからだ。

この作品はみんなで「ホーム」を想像する。家は物理的な住居の場所だけでなく、住まい、うちなどの言葉が表す概念的な家も意味する。つまり家柄や血族から、自分の心理的居場所までを指す。「ホーム」には家より家庭や故郷の意味が拡張された、英語の home を単純にカタカナに変えた以上の意味を含む。

そして観客は、チラシを手にとった瞬間、そして会場にいる間、鏡のように私たちを反射する素材に囲まれていることに気が付くだろう。情報と自分の姿を重ねて見るしつらえは、異空間での非日常を象徴しながら、数多くの情報の中における自分の存在を自覚し、選択を可視化する装置である。観客は会場に入っただけでこの作品の一部となり、コミュニケーションを重ねて自分の痕跡を濃くする。

ホームを想像するのは、おそらく北朝鮮での滞在経験がある者、在日朝鮮人、イラストレーター、AI、そして観客である。皆自分の経験を語り、自分の解釈で表現していく。そこから出来上がる「ホーム」は、誰のものでもないと同時にみんなのものである。解釈のプロセスの中で情報は変化していく。そして知らないものに対する解釈は、自分の知っている範囲でしか行えない。自分の視点で対象を解釈するとは、逆説的に言えば積極的「誤解」をしてゆく行為とも言える。選り抜かれた情報の裏には、削ぎ落とされ、忘れ去られた情報がある。本作品は、変容されるイメージや言葉が真実か虚構かを問うものではなく、その違いを可視化する経験を目指している。

またこの作品は、観客が動きまわりながら参加できる形式で、作品に対する感想を通して未来について語るワークショップもセットで構成されている。自分事ではない問題に向き合っていく時に必要なのは他人の気持ちや状況を想像できる感受性だが、これは経験したことのない北朝鮮の家を想像し、誤解できる余白から生まれるかもしれない。アルゴリズムに従って提示されるいつものおすすめ商品、自分の好みによってキュレーションされる情報を消費する中では得られない、当事者ではない問題に立ち止まることを、この作品は問いかける。

世界は私たちが望む通りには動かない。しかし、少なくともどう動きたいか、どのような世界を望むのかについて考えることはできる。本作品を通して、私たちはその考えをより新しく、よりおかしく広げていく。その考えが重なるとき、社会に流れが生まれ、科学技術はその考えに寄り添っていくことになるだろう。誰かの家を、懐かしくて温もりが感じられるスイートホームとして誤解する、その余白を生みだす「人工地獄^{*4}」が、今の世界にはもっと必要である。

^{*3} 『美術手帖』2024年10月号、「AI が問う人間の知性と「小さなAI」の可能性」

^{*4} 『人工地獄 現代アートと観客の政治学』クレア・ビジョップ、大森俊克訳、2016年